

「幸い、僕の作品を見てくれる人は、今では世界中にいます。」しかし、と草場さんは続ける。

「しかし、僕はそれを武雄で見てほしいのです。僕の作品を育んでくれたこの武雄で、見て頂くことで、本当の意味で僕の作品の価値が伝わる、そういう思いで「陶彩画美術館」を武雄に作りました。」

この武雄で「承継」したいという思いは、子どもたちへ、そして弟子へも注がれている。

「昔、絵画教室を開いていた時に、日に日に絵画を通して心が豊かになっていった子どもたちの姿を目の当たりにして、絵の力で心を育めるのだ、という重要性を実感しました。」と、山内保育園で10年間、子どもたちに絵の大切さを教え続けた貴重な経験を草場さんは語ってくれた。

「この美術館を通じて、子どもたちに絵の面白さを伝えたい、そう願っています。」

使命を果たす

「伝える。次世代のために。」



「平安」(虹色に輝く龍)

下積みから独自の道を歩んだ20年で構想し続けた、七色に輝く龍。小惑星探査機「はやぶさ」制作に携わる友人から素材のヒントを得たと言う。美しさだけではない。草場さんがこだわるのは龍の本質。マグマ・激流の水・疾風と、龍は自然の理の強大なエネルギーを表すそうだ。



これまでに描いた絵本。3冊は今も学校の教科書に使われている、と言う。今の子どもは映像を見るが、絵を描かない。我慢の無い、心を解放して表現できる術を持たなくなってきたということだ。

一方で、草場さんの姿勢や感性から学びたいという志を持つ若者も現れてきた。芸術家として京都を拠点に、今では草場さんのように独自の道で活躍されている河原尚子(かわはらしょうこ)さん(工房STONE-シオネ)だ。

「草場さんから学んだ大切なこと。それは、自分を信じてさえいれば出来ないことは無い、という強さです。今の自分の糧になつていきます。」彼女は、今でも尊敬する師として、草場さんのことを語ってくれた。

草場さんの使命とする「命を繋ぐ」という主題が、子どもたちや若い起業家を通して、確実に受け継がれている、そう実感せずにはいられない。

「僕の絵心を培った武雄で、命の大切さを伝承していきたい。東京でも海外でもなく、この武雄から。」と草場さんは強調する。地域に密着した強いエネルギーが存在すると、刺激を受けた後世は「層強く羽ばたいていける生命力を得る。その強いエネルギーを地方の故郷でこそ生かしたい、これが草場さんの芸術家人生の根底にある、「大いなる田舎者」の精神なのだ。

武雄にはまだまだいる、そんな影響を与える強者たちが、そう感じずにはいられない気持ちになる。改めて感じる。「なんて、パワフルな街だ。」この武雄は。